

巻 頭 言



明日の北海道に向けて

魚 住 聡

(一社)寒地港湾空港技術研究センター 代表理事 理事長

今年の6月の理事会で、平成25年4月に一般社団法人へ移行後第5代目の理事長に就任しました魚住です。昨年の7月に防衛省を最後に退職し北海道に帰ってまいりました。約34年間の公務員生活において、物流、エネルギー、外交そして国防など港湾・空港行政以外の分野も数多く歩んでまいりました。その経験と知識を生かして北海道に貢献していきたいと考えています。

私の最後の職場は防衛省でした。皆さんはご存じないと思いますが、防衛省の職員は開発局職員等一般の公務員とは異なる特別職であるため、防衛省に出向するときは通常の出向とは異なり、令和4年に国土交通省を退職したうえで防衛省に採用されました。この時驚いたのが採用の辞令を大臣から頂くときに「自らの危険を顧みず、職務を完遂を誓う」という宣誓書を読み上げさせられた時でした。一般の公務員として旧運輸省に採用され国家公務員として働いてきましたが、30年以上たって改めて日本国国家のために危険を顧みず働くということ（港湾・空港行政ではなく）を再認識させられたものです。そして防衛省では国家プロジェクトである沖縄県辺野古での普天間飛行場代替施設建設事業のプロジェクトの進行管理の責任者として担当しました。このプロジェクトは地元の名護市は基地受け入れに反対せず、また、普天間基地がある宜野湾市も一刻も早い普天間基地の返還を求めているにもかかわらず沖縄県が反対し、2015年以降法廷闘争にまで発展し、工事の

進捗に支障をきたしてしていました。私の在任期間中は大浦湾側の工事に着手することが出来ず、「沖縄県の変更承認不許可を取り消した国土交通大臣の採決の取り消し訴訟」等の訴訟が高裁、最高裁で訴訟中であり、国会答弁はもちろんのこと防衛省が作成する本プロジェクトに関する公文書に当たる資料はすべて法務省と協議し作成する必要があるなど大変神経を使う仕事でした。

我々土木技術者は法務省と言えば「裁判」をイメージし、あまり法務省の職員に対し行政官のイメージをもっていないのではないのでしょうか？ しかし防衛省で知り合った、法務省の辺野古プロジェクト責任者（実は検事さんなのですが）はバリバリの行政官で菅元総理をはじめとした官邸関係者や自民党関係者の信頼が極めて厚く、これまで私が知っていた公務員の中でもトップクラスの行政官でした。この方とよく「国益」について議論をしながら、二人で辺野古プロジェクトを進めてきましたが、行政マンとして物事を進めていくのに大事なのが、法律的観点はもちろんなのですが、この法務省の方と議論して改めて「総合的判断」だと感じました。この方曰く、「裁判に負けなければ、プロジェクトを進めるならば何でもやろう。」とプロジェクトを進めるためには何が最優先なのかといった観点で、二人でよく辺野古プロジェクトを進める対策を計画し実行してきました。

いま、北海道では、インバウンドの増加、洋上風力への取り組み、2027年にはラピダスでの量

産開始、延期にはなりましたが新幹線の札幌乗り入れ等々北海道経済にとって明るい兆しが見えている中において、防衛省での経験を踏まえ、北海道の地域の利益になることであれば、過去のしがらみや前例などに捕らわれることなく

「とにかく進める」ことが重要なのだという立場で、「港湾・空港」行政において当センターが出来ることがあれば何でも取り組み北海道の地域貢献に少しでも寄与できるよう頑張っていきたいと考えております。